

船の破片に残る話

小川未明

青空文庫

みなみほううみ
 南の方の海を、航海している船がありました。太陽はうら
 らかに、平和に、海原を照らしています。もう、この船の船
 長は、年をとってしまいました。そして、長い間、この船を自分た
 ちのすみかとしていましたから、あるときは自分の体と同じよう
 にも思っていたのであります。

「俺もはやく、こんな船乗りなんかやめて、陸へ上がりたと思
 っているよ。いくら、世の中が文明になったって、こうして船
 にばかり乗っているんでは、ありがたみがわからないじゃないか
 。」と、若い船員が、甲板の上で、仲間に話をしていました。
 「おまえのいうとおりさ。飛行機ができて、一日に、千里も二千

りも、飛ぶようになつたつて、それが俺たちに、なんの利益にもなるのでない。この船でも、新しくあつた昔は威張つて、大きな港などみなと々へいったものさ。それが古くなつて、ほかに、速いりつぱな船ができると、あまり人のいかないうような遠いところへやらされるようになってしまふ。そして、この船に乗っているものは、どうなりつこもない。いつも変わらない、終わりのない労働がつづいているばかりなのさ。」と、仲間も答えていました。

海は、人間の話などは、耳にはいらぬように、朗らかな顔をして、笑つていました。そして白い波は、力いっぱい走つている船のまわりで戯れていました。

このとき、年とつた船長は、いつのまにか、ここにきて二

たりはなし
人の話をきいていましたが、

「わたし
私なども、やはり、君たちのような考えをもつていたことがあ
ったよ。しかし、このごろは、どこへいっても、同じだと思つて
いる。おりおり街の生活もしたくなるが、うそと偽りでまるめ
ていると思つと、この正直な海の上のほうか、どれほどいい
かしれなくなる。いま飛行機といったが、たまに乗る人には便利
かしれないが、職業となつて、毎日乗っている人のことを
かんがえれば、どれほど、この船より危険の多い職業かわからな
い。世の中が、文明になればなるほど、そこには、犠牲になつ
ているものがあるのだ。みんな人間は、しまいにはその職業
業のために死ぬのさ。そう思つていけば、いちばんまちがいが

ない。わたしは、もう、この船の上で、長く暮らしてきた、陸よりも、どこよりも海の上が安心だと思っ
ていているよ。」と、船長はいい
ました。

若い船員たちは、びつくりして、船長のいうことを聞いて
いました。

「じゃ、いつたい、だれが悪いのだ。なにもせずに、食っている
金持ちが悪いのか？」と、いいました。

「金持ちは、金のために、首をつることがあるよ。」と、船長
が笑いました。

ちようど、この船の中に、南洋へいく、大金持ちが乗って
いました。金持ちは、大きな腹を抱えるように、ゆったりとした

足^{あし}どりで、甲板^{かんばん}の上^{うえ}へ出てきました。

「真珠島^{しんじゅうとう}は、見^みえませんか。」と、いつて、あちらをながめ
ました。

船乗り^{ふなのびと}人には、魔^まの島^{しま}として知^しられています。島^{しま}には美^{うつく}しい娘^{むすめ}
たちがいて、月^{つき}のいい晩^{ばん}には、緑^{みどり}の木蔭^{こかげ}で踊^{おど}るといふことでした。
しかし、自然^{しぜん}は、どこも、か^かしこも、人^{にんげん}間^まが荒^あらしつ^つくしたの
で、最後^{さいご}に、これら^{これら}の島^{しま}を守^{まも}ろうとするごとく、無^む数^{すう}の岩^{いわ}がとり
囲^{かこ}み、平常^{ふだん}ですら、波^{なみ}が高^{たか}くて近^{ちか}寄^よりがたいところとなつていま
した。

「波^{なみ}は、静^{しず}かですが、い^いくらか曇^{くも}つてい^いるので見^みえませ^せん。」と、
船長^{せんちやう}は、答^{こた}えま^ました。

「どうぞです、お礼は、いくらでもしますが、真珠島へ、この船を着けてはくださらないか。きつと、あの島へいけば、掘り出したものがあるのだから——。」と、金持ちは、頼みました。

船長は冷やかに笑っていたが、若い船員たちは、目がかがやかしました。このようすを見て、金持ちは、

「たまには、金を握って、帰って、都会の文明にも接したり、うまい酒も飲んでみるものだ。」と、いいました。

「そうだ、船を真珠島へ着けよう、俺たちは、それだけの冒険をするかわり、うんと報酬をもらわなくちやならない。」と若い船員たちは、ほかにもいつか甲板の上に集まってきた、といったのでした。

ひとり、せんちょう船長は、だまつて考かんがえていましたが、

「おそかれ、はやかれ、一度どは、あの真しん珠じゆ島とうへ船ふねを着つけるようになるだろう。私わたしは、この船ふねと運うんめい命めいを一つにすればいいのだ。みんなが、気きままにするがいい。」と、せんちょう船長は、いつて、自じ分ぶんのへやへはいりました。

へやには、青あおい鳥とりが、かなかごの中なかで、じつとしていました。よく馴なれていて、せんちょう船長の顔かおを見ると鳴なきました。せんちょう船長は鳥とりの

そばへ寄よつて、

「長ながい間あいだ、よく私わたしをなぐさめてくれた。おまえの声こゑをきくと、あの南なん洋ようの人にん間げんに汚けがされない、らんの花はなの香におう森しん林りんを思おもい出だすのだ。おまえは、その強つよい翼つばさで、森しん林りんへ帰かえつたがいい。」

こういつて、かごの戸をあけて、鳥を海の上へ放してやりまし
た。青い鳥は、しばらく操舵室の屋根の上にとまってあたりを
見まわしていました。

「ああ真珠島だ。真珠島だ。」という叫びが船の上から起こ
りました。この時分から、ようやく波のうねりが高まってきまし
た。

海の色を見つめていた船長が、突然危険の警告を発し
ましたが、もうまにあわなかつた。船は、ひどい音をたて、暗
礁に衝突したのです。見るまに古い船体は壊れてしまい、
金持ちも、若い船員も沈んでしまえば、また船長もその姿
を見失ってしまいました。晩方にかけて、ひとしきり、風も波

も高^{たか}かつたが、それもしだいに静^{しず}まつて、海^{うみ}は、もとの平^{へい}静^{せい}にかえりました。

月^{つき}の明^{あか}るい島^{しま}では、その夜^{よる}も少^{しょう}女^{じよ}は、唄^{うた}をうたいました。そして、島^{しま}をはなれて、幾^{いく}十^じ里^りの沖^{おき}合^あいには、船^{ふね}の破^は片^{へん}が漂^{ただよ}い、その上^{うえ}に青^{あお}い鳥^{とり}がとまつて、潮^{しお}のまにまに流^{なが}されていました。独^{ひと}り、岩^{いわ}に碎^{くだ}ける波^{なみ}だけは憤^{いきどお}つて、永^{えい}久^{きゆう}に自然^{しぜん}の恨^{うら}みを伝^{つた}えているごとくであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「蘭の花」三友社

1940（昭和15）年10月

初出：「童話の社会」

1930（昭和5）年3月

※表題は底本では、「船《ふね》の破片《はへん》に残《のこ》る話《はなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年1月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

船の破片に残る話

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>